

**無縁社会はシングル社会**

無縁社会と呼ばれる世の中である。なんとかこれを宗教の力で“有縁化”できないものだろうか。

無縁社会とは、一人ひとりがいわば孤立し、ばらばらにされている社会である。要はそれをつなげることだ。人間関係があれば、人は孤独から救われる。そのつなぎの“縁”を宗教がどう提供するか。問われるのはこれである。

縁には決まった形態があるわけではない。それはどこまでも融通無碍である。だとすれば、縁をつなぐにしても、従来の考えに囚われない、逆転の発想もときに必要である。宗教である以上、そのような発想は可能なはずだ。なぜなら、世間の価値観を乗り越えるところに、宗教の存在意義があるからである。

無縁社会はシングル社会である。シングルはしばしば否定的な意味で語られる。実際それは未婚・非婚・離婚という形で、結婚して家族を形成する生き方と対比されたり、配偶者や家族と離別・死別して一人だけになった、消極的・欠損的な生き方として位置づけられたりしている。

地域社会はいまだ家族世帯単位の発想が中心である。地縁や血縁という意味での縁が強ければ強いほど、シングルに対して排他的な態度を取ってしまいがちだ。また、シングルのほうでも、あえてそうした縁を避けて自らの中に閉じこもろうとする傾向がある。

表札も出さず、マンションの一室に住んでいるシングルは、老若男女を問わず、数知れず存在する。彼らにはなかなか声をかけにくい。いや、それ以前に、人々は彼らの存在そのものに気がつかなくなったりする。しかし、現実にはシングル世帯は都市部を中心に、ますます広まる一方である。いずれ、他人に迷惑をかけない限り、シングルなのは当たり前というような時代が来るかもしれない。

シングルの中には、一部のフェミニストのように、強い自我を持つ確信的シングルもいる。しかし昨今では、なんらかの縁に頼りたいのだけど、そうした縁に恵まれず、人々とのつながりの輪からこぼれ落ちてしまったという形で、シングルになっている場合が少なくない。マンションに一人ひっそりと住んでいるシングルも、もしかしたらそうなのかもしれない。彼らも若く元気なうちは仕事もあって、夜はただ自分の部屋に寝るだけの生活をしてよかった。だが、年を取って病気したりしてはじめて、その生き方が実は孤立と背中合わせのものだったことに気がつくのである。彼らはそこで、はじめて自分のシングル性に気がつく。しかし、そのときには人とどうつながっていけばいいのか分からない状況になっている。本当は、人々とのつながりをずっと欲していたはずなのに。

**“単独者”としてのシングル**

そもそもシングルであるとは、一体どういうことなのか。宗教ならではの独自のシングルの思想について考え、世間一般のシングルの概念にぶつけてみてはどうであろう。

どちらかといえば、宗教は家族主義を助長する志向性を持っている。しかし、発想をここで逆転させ、宗教ならではのシングルの思想を取り出し、これを深められた意味で人と人とのつ

ながりに関連させてみたいと思う。

よくよく考えてみれば、どんな人間でも自分は自分以外の何者でもないのだし、死ぬときは自分の死を死ぬわけだから、その意味でだれもがシングルである。それは、実存思想で“単独者”と言ってきた概念である。自分が自分自身であり、しかも真の意味で自分自身でなければならないという深い自覚に思い至ったとき、地位、名誉、財産、家族、健康など一切の外面的要素は背後に退いていく。単独者とは実にそのような者なのである。そうした自分に向き合い、応答できるのは、神仏のような超越者のみである。

何ものをも所有せず、常にただ自分一人でしかあり得ない単独者がいるとすれば、その者こそシングル中のシングルである。誤解を恐れずに言うならば、それは“ホームレス”のような存在なのかもしれぬ。宗教者の“宗教性”には、どこかホームレスの“ホームレス性”にも通じるものが確かにある。だからこそ逆転の発想たりうるわけである。

現代のように無縁社会と言われる時代だからこそ、我々は逆に人間存在におけるこのシングル性（単独者性）に目覚めるべきではないだろうか。そして、そのことによって、無縁社会を宗教の力で“有縁化”するという、冒頭の課題解決に向けての、一つの方向性を示すことができるようにも思われるのだ。それは、シングル同士でつながって行くことができる“縁づくり（支縁）”の場を作り上げることである。

だれもが皆シングル、すなわち単独者であることを自覚したとき、人と人との交わりもまた、その根本はシングルとシングルとの交わりであることを知るだろう。なぜなら、自分という存在が自分以外の何者でもない気がついたとき（つまり自分のシングル性に気がついたとき）、はじめて他者もまたシングルとしてあることにも思いを致すことができるからである。

そこに開けてくる単独者相互の神秘に満ちた回路こそ、真に宗教的な意味での縁であると言えるであろう。そのような縁は、この世的な価値観を超えたところから差し伸べられてくるという性格を持っている。いや、より正確に言うならば、あらゆる縁が実はそのような超越的性格を有しているのである。だからこそ、それは縁と呼ばれるのである。このようにして、縁の自覚は、人々の内なる宗教的自覚を覚醒させてくれる。

ここまで論じてくれば、特定の宗教的信仰という形を取らずとも、人がそれぞれの仕方で自らのシングル性（単独者性）を自覚し、その上での他者との神秘的なつながり（縁）に気がつくことによって、だれもが宗教的存在になりうるとは言えないだろうか。宗教的なものの本質は、単独者として生きるその内面性にこそ見出されるのである。

それゆえ、シングルは決して孤立した社会的弱者などではない。この生き方こそ、真に自己自身になることなのだ。この気概を持つことから、人間として生きる活力も生まれてくる。また、充実したシングル同士であれば、充実した縁も形成することができる。宗教が作り上げるべきは、このような“縁づくり（支縁）”の場である。そしてそれは、宗教自身の新たな展開の可能性を開拓することにも成りうるのである。